

2022年10月2日

【良きサマリア人】

ルカによる福音書

10:25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。

「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」

10:26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、

10:27 彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、

あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」

10:28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

10:29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。

10:30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。

追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。

10:31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。

10:32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。

10:33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、

10:34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

10:35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。

『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

10:36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

10:37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。

「行って、あなたも同じようにしなさい。」

有名な「良きサマリア人のたとえ」の箇所です。

でも、この話の前提はユダヤ人宗教指導者からイエス様への「悪意ある質問」「陥れようとする質問です」良きサマリア人のお話は、それらの質問に対する答えとして語られています。

1) 試そうとしての質問

ここに二つの質問が投げかけられています。

10:25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。

「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」

律法の専門家たちはイエス様の生き方を見て、「あなたは何をすれば永遠の命を受け継ぐことが

できると思いますか」つまり「何をすれば神様に喜ばれる生き方に通じると思えますか」と尋ねました。

その背後にはイエス様が病人たちを相手にし、酒飲みや徴税人、世の中で罪人扱いされている

人たちと関わって生きていることへの不信感があったのです。

あんな人たちと関わっていたら、神様から喜ばれるはずはないと彼らは感じたのでしょう。

きっとイエスという人は、律法を軽視していると彼らは感じたのです。

それに対してイエス様は質問を投げ返します。

10:26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、

彼らは自信満々に答えます。

10:27 彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、

あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」

イエス様は、その通りだと答えます。そしてさらに、それを生きると勧めました。

10:28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

彼らから見れば、イエス様がそれを実行しているようには見えなかったし、そういうふうには理解もしていませんでした。彼らは自分たちこそ正しい生き方をしている人間だと自信を持っていたのです。

逆に言えば、イエス様から言われたことで腹を立てたかもしれません。

そこで律法学者は

10:29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。

この学者には答えが既にありました。

「神を愛し、隣人を愛する」ということは「ユダヤ教に熱心になり、ユダヤ人同胞を愛すること」と考えていたのです。彼らにとっての「隣人」とは「正しい生き方をしているユダヤ人」のこと以外考えられなかったのです。つまり、ユダヤの歴史と掟の中にしっかり自分をはめ込んで生きること以外考えられなかったのです。

規則を守ること、ユダヤ人を愛すること、それ以外なかったのです。

そこでイエス様はたとえを話します。

2) 「良きサマリア人」のたとえ

10:30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。

追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。

10:31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。

10:32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。

10:33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、

10:34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

10:35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。

『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

ある旅人が追い剥ぎにありました。おそらくユダヤ人だったでしょう。

彼は全てを持ち去られ、半殺しの目に遭いました。血だらけになり、道路の端にうずくまっていた。これは当時の社会ではどこにでもあるような話だったのかもしれません。

そこに3人の人が通りかかります。。

最初の人「祭司」その次は「レビ人」最後が「サマリア人」です。

祭司もレビ人も神殿に仕えている宗教関係者であり、律法に明るい人たちでした。彼らは間違いなくこの半殺しの目にあった旅人を見ている。認識しているので

す。

でも、彼ら、二人とも「その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。」とあるのです。

宗教行事に関わっている二人ですから、規則によれば、そういう行事の前に「血」に触れたら

清めのために時間がかかるし、約束の時間にも間に合わなくなる可能性があると考えたのかもしれませんが。いわゆる「律法的」「規則的」にはその判断は間違っていないのです。

「道の向こう側を歩いて行った」という言葉は印象的です。

「私は関わりたくない」「私はあなたと無関係だ」と表現しているように感じます。

それでも、彼らは「神を愛し、隣人を愛している」と信じ、自信を持っています。おそらく内面的な葛藤はあったと思います。どうしようか、この人を助けようか、それとも神殿での奉仕を全うしようか。そういう葛藤はあったと思います。思いたいです。でも、この二人は規則を選び、職務を選びました。目の前にある「救助要請」を断ったのです。

ところが三人目に登場するのは「サマリア人」です。実はサマリア人とユダヤ人の間には歴史的な確執があり、反目しあい、イエスさまもエルサレムに行くのを妨害されたほどでした。

ところがこのサマリア人はそれまでの二人の宗教関係者とは異なった対応をしました。

10:33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、

10:34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

10:35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。

『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

彼はこのひどい怪我をした人を見て「そばに行き、心を動かし、近寄って傷に手当てをし、自分の口バに乗せ、宿屋まで連れて行き介抱したのです。そればかりか、金銭的なことについても自分で支払う事を宿屋の主人に約束しています。

ユダヤ人の宗教関係者の心にあったのは「規則」

このサマリア人の心にあったのは「その人を見て憐れに思い、」という「愛、優しさ」

進んで関わりを持ち、痛みを担おうとしているのです。

不思議です。ユダヤ人から見ればこのサマリア人は敵であるばかりか、神の怒りを

受けるべき存在ですから、この人に神の愛があり、人を助けたいという思いがユダヤ人以上にあるなどということはユダヤ人から見たら、考えられないことだったと思います。

3) 結末

この話はユダヤの宗教者には決して喜んで聞いていられないものだったと思います。

サマリア人がヒーローになってしまう話など聞いていられなかったはずです。彼らはユダヤ人の敵、つまり神の敵だと考えていたからです。

イエス様を試そうと質問してきた律法の専門家にイエス様は尋ねます。

10:36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

律法の専門家は素直に「サマリア人です」と言えません。

ですから

10:37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」と応えます。

悔し紛れの答えかもしれません。

そして、結論は

イエスは言われた。

「行って、あなたも同じようにしなさい。」

＊＊

この専門家は「私の隣人は誰ですか」と尋ねました。

彼は「隣人」とは「正しい行いをするユダヤ人」と心に決めて、信じ込んでいたのです。

でもイエス様はそれを覆しました。

この困窮している人に対して「誰が隣人」になったのですが、あるいは、誰が隣人になるのですかと問うたのです。そしてイエス様は彼に

「行って、あなたも同じようにしなさい。」

と語りました。

隣人を愛するとは、こういう事だということです。

トルストイは「愛あるところに神あり」という短編集を書きました。

「神を信じているから愛がある」という考え方が主流かもしれませんが、愛があるからこそ「そこに神の麗しさと神の心が見える」というふうにも考えられると思います。

＊＊

私たちにとって教会の仲間たちは大切な隣人です。
同時に神の家族です。

でも、私たちにとっての隣人は日々、生活の中で変わっています。
今日、あなたがケアすべき隣人。明日、あなたが関わるであろう隣人は
私たちには、その時にならないとわからないのです。

そして、その関わり方は「決まり」とか「規則」ではありません。
「神に愛されている事を知り、神の愛を受け取り、その愛で、人に触れていくので
す。
このサマリア人の旅人は傷ついた血だらけの人に対して「憐れに思った」とありま
した。

必ずしも「可哀想に思う」という意味だけではなく、誰に言われたわけでもなく、
何か
「助けたい気持ち」「一緒にいてあげたい気持ち」「何か協力してあげたい気持
ち」が
内側から湧いてきて、その促しに基づいて助力、協力、支援の行動をとる、それは
いわば
「人を愛する」という隣人愛の根底の部分だと思います。

規則ではないのです。義務感からというわけでもありません。文化も習慣も宗教も
異なっている
サマリア人が、敵対しているユダヤ人の瀕死のけが人を愛ゆえに助けている、これ
が神様が望まれる
「他者への愛」の一つの形と考えることができるでしょう。
そこにはいわば、「垣根」がないのです。

内側からの促しによって「支援、寄り添い」の心が湧いてきて、協力支援、助力に
向かうのです。
そういう支援は内側からの促しがあるので、不思議なほど「お返しを求めない」
「報いを求めない」という傾向もあります。

私は神学校時代、信仰は同じでしたが文化も習慣も言葉も違う、それこそ右も左も
わからない私を、学生達も先生達も、仲間、隣人として本当にあふれんばかり愛し
ていただきました。
牧師になっても、教会に通っておられた高齢者のいわばおばあちゃんたちに本当に
愛され、支えられてきました。今、MACFの仲間達に支えられ、こうして生かされ
ている事を感謝しています。

でも、同時に、私は教会の関係者以外の人たちからも、特に臨床美術に関わる方々から本当に

愛され、支えられてきたこともお伝えする必要があると思っています。

木村クリニックに関わっている方々からも同様に、愛され、ケアされていると感じています。

つまり、いろいろな場面に神様の愛はあふれているのです。あの人はクリスチャンではないから

本当の愛は知らないとか、わからないとか、言うてはならないだろうと思います。

彼らの中にも

神様からの愛は注がれています。それがどこから来たのか気づいていないということとは

あるかもしれません。でも、キリスト教徒以外の人には愛はない、などというのは不遜です。

それは、私たちが本当に気をつけなければならない霊的傲慢だろうと思います。

もう一度、このやりとりを読んでみてください。

規則をしっかり守ることこそが神の道にふさわしいのだと信じていた律法の専門家にとって、イエス様のお話がどんなふうに関心したか考えてみてください。

そして、同時にあなた自身にとって、このお話にはどういう意味があったでしょう。

規則重視ですか、それとも愛の促しを心に留めながら生きていますか？

「あなたも行って同じようにしなさい」と言われた言葉は、あなたに何を語っていますか？

MAC F礼拝映像はこちらです

<https://youtu.be/GV5wQuZfVQU>

【お知らせ】

今週からOCCでのMACF礼拝が再開しました。感謝しています。いろいろな規制があり、ご不便をおかけしますが、徐々にその規制が緩んでいくようにと願っています。

次回は10月16日午前十時からです。

ご希望の方は pastor.kaz@gmail.com までご連絡ください。

なお、体調不良の方、発熱している方、体調と集会に不安を感じている方はどうぞご自宅でYoutubeで礼拝をしてください。OCCでの礼拝が「全て」ではありません。Youtubeを通して神様を礼拝することも、きちんとした礼拝であり神様は受け取ってくださいます。そこにも大きな祝福があります。

今週の金曜日には「バイブルワークショップ&メディテーション」が開催されます。

午前十時と午後8時からです。ご参加ください。

今まで参加したことのない方は pastor.kaz@gmail.com

まで連絡ください。Zoomの招待状を送ります。